

## ねぎ黒腐菌核病について

ねぎ栽培において、黒腐菌核病は、古くから発生が確認されている病害です。連作等による病原菌の増加や気象状況の変化等により、近年、大きな問題となっております。しかしながら、単独の対策で十分な防除効果を得ることは難しいため、土壌消毒や耕種的対策、ねぎ生育期の薬剤処理を組み合わせた対策をとることが必要です。

適期に効果的な対策を実施し、安定したねぎ生産を行いたいです。

### 1 病原菌の特徴

①比較的に低温を好み、発育適温は15～20℃です。気温が10℃前後の時に激しく蔓延します。(25℃以上では発病しにくい)

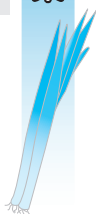
②被害部分に形成する大量の菌核が土壌中に残り、長年にわたり伝染源となります。

③排水の悪いほ場やpHが低いほ場では、発生リスクが高くなります。

### 2 防除対策

#### (1) 排水対策

ねぎは過湿に弱く、大雨が降り、



ほ場に水が停滞すると根痛みを起こします。

ほ場に額縁状に明きよを掘り道路等のほ場周囲からの雨水の流れ込みを防ぐとともに、降雨後の畝間の停滞水を速やかに排水路に落としましょう。(写真)



写真 畝間と額縁明きよを繋げた例

#### (2) 薬剤による防除

黒腐菌核病の生育温度に合わせて、農薬による体系防除を行います(表1参照)。

土寄せ作業が進むと、薬剤がねぎの茎盤部(根本)に届きにくくなります。この病害に対する薬剤防除は、茎盤部までしっかりと薬剤を届かせることが重要なポイントとなります。農薬の使用基準に示された薬液量を適期に、確実に処理します。

パレードフロアブルは、定植後根が活着し、黒腐菌核病の菌糸が

活性化する時期を狙って、規定量10アール当たり300ℓを株元中心に散布します。また、モンガリット粒剤は低温期に処理すると生育遅延等の恐れがあるため、使用時期に注意が必要です。  
1回目…9月下旬～10月上旬(平均気温が20℃を下回る時期)  
2回目…1回目の消毒後1～1か月半後

表1 黒腐菌核病の農薬例(令和2年8月1日現在)

作用機構分類 (FRACコード)	農薬名	希釈倍率・使用量	使用方法	使用時期	本剤の使用回数	散布液量
3 (G1)	モンガリット粒剤	6kg /10a	株元散布	生育期(ただし収穫14日前まで)	3回以内	
7 (C2)	パレード20フロアブル	2,000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	300リットル/10a
	アフエットフロアブル	1,000~2,000倍	株元灌注	生育期(ただし収穫14日前まで)	2回以内	1リットル/m <sup>2</sup>
12 (E2)	セビアーフロアブル20	1,000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	300リットル/10a

表2 ネギ黒腐菌核病の主な土壌消毒剤(令和2年8月1日現在)

作用機構分類	農薬名	希釈倍率・使用量	使用方法	使用時期/使用回数
8(他) 8A	ディトラベックス油剤	30~40ℓ /10a	ほ場を耕起・整地した後、所定量を深さ12~15cmに注入し直ちに覆土・鎮圧する。薬剤処理7~14日後にガス抜き作業を行う。	は種又は植付の14日前まで /1回
8F M03(M)	ガスタード微粒剤またはバスアミド微粒剤	30~60ℓ /10a	本剤の所定量を均一に散布して土壌と混和する。	は種又は定植の14日前まで /1回
8F	キルパー	原液として60ℓ /10a	所定量の薬液を土壌中約15cmの深さに注入し直ちに被覆または覆土・鎮圧する。	は種又は定植の10日前まで /1回

### (3) 土壌消毒の実施

薬剤で土壌消毒を行い、土壌中の病原菌密度を下げます。消毒の際は、必ずビニールで被覆し、処理効果を高めます(表2参照)。  
本病原菌は、土中に独占的になると激増する傾向があり、逆に他の様々な菌が存在すると菌の競合が起き、活性化しない傾向があります。消毒後は、ねぎを作付する前に、イネ科やアブラナ科作物の栽培や、窒素分の少ない完熟堆肥の投入、微生物資材の施用を行い、ほ場の菌層を整えます。